講演記録

「ハンセン病回復者の人権問題」②

全国ハンセン病療養所入所者協議会事務局長

神　美知宏（こう　みちひろ）

この講演記録は、2003年7月28日に人権相談員等の「養成講座」で神さんに講演いただいたものの記録を掲載しています（2回にわけて掲載しています）。

私の決心

療養所に10年ぐらいして医局に呼び出され「こうざきさん、あなたの病気はこの療養所にいる必要はない」と言われた。しかし、私はこれからの人生を考えていると自分だけの幸せを考えて、追求してこの療養所を出ていくことはしない。社会復帰はしない、と。27・8歳だった私は、刑務所のような実態であるこの施設、人間を人間でないあつかいをするこの施設を改善しなければならない。一生涯この運動をしつづけることを決心しました。それから、40年、大島青松園を出て、東京で活動して8年、69歳になります。これからも、こういう運動の先頭にたってやっていくことができるのかとの不安もあるが、私の決断したことは間違っていないと思っています。

今の私の仕事は厚生労働省が主催する様々な会議に出席することです。また立場上、北海道から九州と招かれて走り回っておりますが、市民のみなさまと膝をつきあわせながら私どもの立場なり事情を説明することこそ、私の社会復帰と同じことではないかと思っています。

“本名に戻る”と声明、母親の死

1996年「らい予防法」が廃止になった時、菅厚生大臣が東京東村山市にある多磨全生園に訪れまして、入所者や家族のためにひどい仕打ちをしたと謝罪しました。約500人の入所者がいました。私は事務局長の立場であり、まだ偽名を使っている立場でした。運動の先頭にたっている自分が偽名を使っている腹だたちさ、この機会に、本名にもどる「神美知宏にもどる」と声明しました。入居者の90%以上の方は完治しているが社会復帰できていない。「らい予防法」が廃止になった今こそ新しい風が吹くと思いました。

私が本名に変わることを新聞記者をしている兄は「もっと早くにするべきだった」と賛成してくれた。また、「遅すぎたくらいだ」と兄はいってくれた。菅さんが訪れとき私は、あえて母親の反対をおしきってその場で今日から“こうざきまさお”という仮の名前をすてて本名にもどると声明いたしました。マスメディアのみなさん方は大臣の一挙手一投足を取材するのが仕事です。私が菅さんの前で本名に戻るということを声明し大々的にとりあげることになりました。特に朝日新聞の「ひと」というコラムに写真入りで“神崎正男”から“神美知宏”と声明したことが大々的に新聞にでました。

母親の立場としてはやってもらいたくないことをあえて私が本名を名乗ったために新聞に大々的とりあげられました。こんな偶然はないのですがその日、母親は死んでしまいました。あれほど私が本名にかわることを反対していたのに新聞に“みちひろ”が写真入りで公表したことは衝撃的で、そのことが、突然死の要因になったのではないかと考えられます。兄貴からの電話連絡を受けてまず「自分で死んだんじゃないか」ということを聞きました。実は昨日までぴんぴんしていたが、急性心不全でした。「母親はお前が新聞記事にで出ているのを見ずに、死んでしまった」と。なんという偶然だろうか。

葬式の話では神家の二男である私が葬式に出席するかどうか。「もう、40年も家に帰ってきていない。町や村はお前の存在を忘れている。残念、だけれども、葬式にも出ないでくれ」と兄に言われ、自宅の家の中で熊のように葬儀の終わるまでウロウロしていました。

それから、3年経過し、“墓参りに行きたいが”と相談すると、「だれにも見つからないように、してきてくれ」と。兄の意見にとらわれずに、私は自分の思うままに電話連絡して、四国から北九州にわたり、30センチほど雪が積もり、駅から墓地までそんなに遠くなかったのですが車でいきました。雪の中をかきわけてきた兄が、履物もベちゃベちゃになるであろうと長靴を持ってきてくれた。考えてみれば、肉親のささやかな思いやりだった。

長靴にはきかえて、兄と2人で墓の前でしばらく沈黙していた。兄は、墓地をあけて、「両親の遺骨はあそこにあるよ、おまえの遺骨は両親の横においてあげるよ」と、兄のせめてもの思いやりだったのでしょうか。気持ちは分かるけれど、病気の実態、すべてを総合して、病気が完治されているのに依然と蚊帳の外、骨になって墓にはいることをいうなら、生きている間になぜ敷居をまたがさないのか。死んで両親の遺骨の横になって喜ぶと思うのか。まあ兄貴として、せめてもの思いやりと思っています。生まれた家に帰ることを誰も喜んでいない、秘密を守るように四国の療養所に帰っていきました。

「遺骨を山に」…雨に流れて、世界に

全国の入所者は家族にそうゆう状況で対応されています。まだ、3,800人が生き続けています。ハンセン病は昭和30年ぐらいにほぼ治っています。今、現在のデータによると99%の者が完治し、1%の者が治療を続けています。平均年齢も76歳になっています。日本で発病するものは1年に4・5人になってきました。しかも特効薬が開発されていますので1週間ほど治療をうけると治ります。

しかし、療養所にいるものは年をとるほど故郷のことを思

い出します。あの山や川や家はどうなっているかという思いがあります。家族からは残念ながら帰って来いということを聞くことはない。一番近い家族ほど入所者を遠ざける。家族にとっては、"本当は温かく受け止めてやりたいが世間が怖い、社会が怖い。おまえは40年ほど療養所にいたんだからもう療養所で死んだものとして遺骨をうけとる"と。親の墓参りも自由にできない社会がある。鹿児島に「星塚敬愛園」という療養所があり400人ほどの入所者がいます。80歳ぐらいになる人が裁判を続けていました。70年間も療養所からでたことがない。どうして、自由に外にでられないのか。せめて、私が、死んだら遺骨をふるさとの山にまいてほしい。遺骨を山にまけば、雨がふると川に流れ海にそそがれる。世界に通じる。生きているうちにふるさとに帰ることができなかった。せめて遺骨を散乱してほしい。あの家から病人が出た。療養所で死んでしまえばそれでおわると思っているが、それはちがうことである。

2ヵ月ほど前、私の弟の子どもの縁談がこわれてしまいました。30歳ぐらいです。まとまりかけた縁談が破談になりました。おじさんが病気になって療養所に入り、今なお生きて療養所にはいっているということがあります。私は69歳になって死支度の時期になってきました。

「生きていて良かった」と思うクラス会

今年の3月のことですが、小学校のクラス会をすることになりました。"どうも同級生だった神美知宏は生きているらしい、という情報がある、生きているのならクラス会で紹介しようではないか、とみんなで相談している"と。私の同級生が涙なしでは語れない文面の手紙を送ってきてくれました。生きていて良かった。死ななくて良かった。家族のものに相談した。クラスのものが住んでいるし、家族の反応を確かめてみたかったからです。「この際、帰ってこい、お前が帰ってきてこそクラス会が意味のあるクラス会になる」と。

別府の温泉でゆっくり浸かってクラス会をしました。17人に集まっていました。そのうち女の子が7人いました。「みっちゃん、大きくなったね」「70歳のおとなに向かって大きくなったねはおかしいね」小さかった女の子が「みっちゃん、大きくなったね」と。他のみなさんは異口同音に「よく生きていてくれたね。たいへん苦労したんじゃないか。家族のみなさんがひた隠しにしようとしているのが痛いほど分かるので、神美知宏さんどうしていたのかと、喉までできているが聞くことができない」

家族のものは50年も、住んでいないので何にも知らないと思っている。みんな私のことを知っていました。

いつ家を出てどこで何をしていたか。新聞やニュースに出たのでそれを情報源にみんな私のことを知っていました。新聞に出て3軒隣りのおばさんが「みっちゃん生きていたんだ」と電話があった。「早く、帰っておいで。家族のみんなはどういっているの」と。

ハンセン病問題は差別の原点

今は、ハンセン病をまっすぐにみて頂きたい。認識を高めてもらわなければならない。ハンセン病問題は差別問題の原点、私はそういう認識でおります。おそらくみなさんがどの程度ハンセン病の認識があるかわかりませんが、ハンセン病問題が抜本的に本当の意味で社会で一層解決されなければ私たちの入所者の市民権は得ることはできない。人間回復はまだまだ先のことであると認識しています。

次から次へと新しい差別問題の出てくる日本の社会の実態から考えると、ハンセン病に対する偏見が解消され差別のなくなる日は、100年待つに等しいのではないでしょうか。

昭和25年頃は収容者数が一番ピークに達しました。全国15ヵ所12,000人に達していました。強制収容・強制隔離社会で私たちが生きることを、許さない政府であり地方自治であり、大々的に一般に運動が行われてきました。みなさんの身のまわりには、ほぼいないと思います。みなさん、「らい予防法」が廃止され、一昨年熊本地裁で判決がだされ、「これで日本におけるハンセン病問題は解決したじゃないか」、私はそういう認識が社会問題になるのを恐れています。みなさんもそういう意味で見なおしてほしいと思います。

1950年は12,000人、それから50年たって3,050人になる。一年間で200人近く亡くなる。これからの入所者がどのように減り続けていくか、どのような生活設計をするのか。10年すれば今3,800人が半分に、15年すれば3分の1になると推定されています。10年・15年先を展望しながら今何をしなければならないか。市民のみなさま方もいっしょに考えてもらわなければならないことを、私は許されるなら問題を提起させてもらっています。

ハンセン病療養所にはいろんな方々がいます。いろんな選択肢もあってもいい。日本の社会もみていると高齢化・核家族化社会、若い頃は高度成長時代で一生懸命に働き60、70になり、これからの自分がどうなるのかと不安になる。家族のみなさまはこれを大きな課題として考えなければならない市民の問題だと思います。

介護保険の恩恵を受けて高齢者社会が幸せになったのだろうか。高齢になって病気になっても病院の経営によくないとおいだされ、いきつくところは老人の福祉施設しか落ち着くところはなくなってしまった。高齢者のみなさんは施設にはいるのに満杯で3、4年待たなければならない。そうゆう苦悩の中で高齢者のみなさま方は頭を悩ませている。私がその人たちの最後の老後の人生をすごすのにハンセン療養所を開放してはどうか。ハンセン療養所に入所しているのは、実際年寄りばかりで、だんだん空き部屋が出てきています。そこを市民、社会に開放する時がきたのです。

こうゆう時代になって、社会復帰しようとしてきたものもでてきました。それも大切なことですが、療養所自体が社会復帰する。社会化を考えてくる時期がやってきたと思います。だれも見てくれないひとりぼっちの老人がハンセン病のひとたちとともにいっしょに暮らす。国の考えは、人数が少なくなれば取り壊しを考えています。全国ハンセン病療養所入所者協議会略して全療協といいますが、たとえ人数が少なくなったとしても社会を守る。隔離された私たちが右から左に移ることを国はいうべきでないと要求し、約束している。しかし、どちらかというとハンセン病療養所に死んでもそんなところにも行くかという実態を把握しながらこれからの人生を考えていきたいと思う。

多くの方が自ら命を絶った場所